子ども用

伝 道 地 便 り

2025 年第 4 期　南アメリカ支部

第 1 話「天国の力」	チリ
第２話「なくなったフライパン」	チリ
第３話「ガレージでのすてきな集会」	ブラジル
第４話「テレビのニュースが怖い」	ブラジル
第５話「神様との人生はすばらしい」	ブラジル
第６話「アマゾンの忠実な少年」	ブラジル

ADVENTIST MISSION

セブンスデー・アドベンチスト教団　伝道局　安息日学校部

伝道地便りの用い方の ヒント

伝道地便りに収められているのは、現地からの一人ひとりの生きた経験です。安息日学校でこれを用いるときには、生き生きとご紹介していただきたいのです。そのためのヒントを、いくつか列挙いたします。

1）前もって何度か目を通し、自信を持って読む。

2）棒読みは避け、証されている大事な部分を明確にしておく。

3）伝える時間はできるだけ短く。長くても５～７分。

4）だれが、いつ、どこで、何を、なぜ、どうしたかが分かるようにする。

5）できたらカードに文字や絵を書くなどの視聴覚的工夫を。

6）時には、スキット（寸劇）風にしてくださっても良いですね。

伝道地便りは、私たちが自分の証をするときの練習になります。
主の愛の証のために、「心を尽くし、精神を尽くし、思いを尽くして」
紹介しましょう。

「天国の力」

チリ

マナ

マナ・ヘヌアという名前には、「大地の力」という意味があります。マナは「力」、ヘヌアは「大地」を意味します。しかし、みんなは親しみを込めて、簡単に「マナ」と呼んでいます。

マナは12歳の少年で、イースター島に住んでいます。イースター島はチリという国の一部ですが、南アメリカ大陸のチリ本土からは、遠く離れています。島は太平洋のまんなかにぽつんと浮かんでいて、どこからも離れたところにあります。

しかし、イースター島は神様からは少しも遠く離れていません。

マナは小さい頃、毎週の安息日におばあちゃんと一緒に教会へ行って、少しずつ神様のことを知りはじめました。しかし、必ず安息日に教会に行くわけではありませんでした。疲れて家で休みたい日もあれば、ただ家でのんびり過ごしたい日もありました。安息日におばあちゃんと一緒に教会に行く日もあれば、家にいる日もあったのです。

そんなある日、イースター島に宣教師の家族が引っ越してきました。その家族は教会で「パスファインダー・クラブ」を始めて、マナをクラブに招待してくれました。

しかし、マナはすぐには決められませんでした。今までパスファインダーの活動をしたことがなかったし、「難しそうだな」「失敗したらどうしよう」と、ちょっと不安だったからです。

マナは、クラブに招待されたことを長い間考えました。何度も「断ろうかな」と思いました。

しかし、ある時マナは、神様にお話ししてみることにしました。

それは、ある安息日の午後のことでした。その日、マナは教会に行かず、家で休んでいました。ベッドの上でくつろいでいると、ふとパスファインダー・クラブのことを思い出し、また不安な気持ちになりました。

「神様、どうすればいいですか。」と、マナは心の中で尋ねました。「クラブに入ったほうがいいですか。それとも、やめたほうがいいですか。」

マナは神様に自分の気持ちを正直に打ち明けました。「僕は心配です。うまくできる気がしません。失敗はしたくないです。」

すると神様は答えてくださいました。神様の声が聞こえたわけではありません。しかし、神様が心に語りかけてくださったように感じたのです。

「こわがらなくていいよ」と、神様は言いました。「もし失敗しても、大丈夫。わたしが君を立ち上がらせるから、またやり直すことができるよ。」その瞬間、マナの不安はすっかり消えました。もう、怖くはありませんでした。そして彼はパスファインダー・クラブに入りました。

マナはクラブが大好きになりました。いろいろな活動が楽しかったし、なによりも、神様のことを深く知ることが嬉しかったからです。

その後、おばあちゃんがイエス様を信じてバプテスマを受けました。おばあちゃんの姉妹も続い

てバプテスマを受けました。マナはふたりが水の中に入っていくのを見て、自分もバプテスマを受けたいと思うようになりました。

マナはその思いを宣教師たちに伝えました。宣教師たちはとても喜び、チリの本土で大きなパスファインダーのキャンポリー（大会）が開かれるから、そこでバプテスマを受けたらどうかと提案してくれました。

はじめ、お母さんはその提案にあまり乗り気ではありませんでした。しかし、教会でのマナの嬉しそうな様子や、クラブの活動での生き生きとした姿を見て、賛成してくれました。

マナはキャンポリーでバプテスマを受け、イースター島のパスファインダー・クラブで最初にバプテスマを受けた子どもになりました。

家に帰ると、お母さんはマナが前よりも幸せそうな様子をしていることに気がつきました。自分もそんなふうになりたいと思い、お母さんもバプテスマを受ける決心をしました。マナは太平洋の水の中へ入っていくお母さんの姿を、ニコニコしながら見守りました。それはマナがバプテスマを受けてから、ちょうど４か月後のことでした。

マナの名前の「マナ・ヘヌア」には「大地の力」という意味があります。しかし、マナはこう信じています。「ほんとうの力は天から来るものだ」と。天の神様の力が、パスファインダー・クラブについての心の恐れを消してくださったのです。天の神様の力が、お母さんを導いてバプテスマへと進ませてくださったのです。そして、天の神様の力こそが、ほんとうの幸せを与えてくれるのです。

「神様は、世界中どこへでも来ることができます」と、マナは言います。「どんなに遠く離れた場所でも、神様はそこへ来てくださるよ。」

マナは今でも、ときどき怖くなることがあります。しかし、そんな時は、安息日の午後に神様が語ってくださったことを思い出します。

「こわいと感じたら、いつでも、神様がぼくを立ち上がらせてくださるっていう約束を思い出すんだ」と、マナは話してくれました。

〈お話のヒント〉

地図を見ながら、南アメリカやチリの場所を探してみましょう。そして、マナの住むイースター島がどこにあるかも見つけてみてください。

- YouTubeの短い動画で、ダフネを見てみましょう。bit.ly/Mana-SAD
- このお話の中でマナがかぶっている帽子は、にわとりの羽で作られた伝統的なぼうしです。
- このお話の写真をFacebookからダウンロードしましょう。bit.ly/fb-mq.

豆知識

- イースター島には、人の頭の形をした大きな石の像（モアイ像）が600体以上も立っています。これらのモアイ像は、西暦1050年から1680年ごろの間にたてられました。
- モアイ像の高さは、だいたい3〜6メートルですが、一番大きなものはなんと11メートルもあります。

「無くなったフライパン」　チリ

カーラ

カーラは６歳です。世界の中でも、一番ひとりぼっちのように見える島のひとつ、イースター島に住んでいます。

イースター島は、南アメリカにあるチリという国の一部です。しかし、この島はチリ本土がある南アメリカ大陸からはるか遠く、約 4,000 キロも西にあり、太平洋にポツンと浮かんでいます。

しかし、そんなに遠く離れていても、すべてを見聞きし、すべてを知っておられる天の神様は、イースター島のことをちゃんと覚えていてくださいます。

カーラはイースター島のセブンスデー・アドベンチスト教会の宣教師たちから神様のことを学びました。安息日になると、おばあちゃんと一緒に教会へ行きました。そして、宣教師たちが作ってくれた「アドベンチャー・クラブ」にも参加しました。

教会で、宣教師たちは、「イエス様は人を愛していて、助けてくれているんだよ」と教えてくれました。その言葉を聞いて、カーラは不思議に思いました。

「本当にそうなのかしら。イエス様って人を愛してくれているのかな。本当に助けてくれているのかな。」

そう思ったカーラは、お母さんが、毎日、一生懸命に料理やそうじ、カーラと２人の妹のお世話をしていることを思い出しました。お母さんはどういうわけか、それを全部やっているのです。「イエス様がきっと、お母さんのことを助けてくださっているんだ」と、カーラは思いました。

それから、お父さんが、一生懸命に家の中を直していたことも思い出しました。お父さんはどういうわけか、いろいろなものを直すことができるのです。「イエス様がきっと、お父さんのことを助けてくださっているんだ」と、カーラは思いました。

そしてカーラは考えました。「イエス様はお母さんのことを愛してくださっている。お父さんのことも愛してくださっている。でも、わたしのことはどうなんだろう……。イエス様って、わたしのことも本当に愛してくださっているのかな。本当に助けてくれているのかな。」

それからしばらくして、カーラの家のフライパンが見当たらなくなってしまいました。お昼ごはんを作るためにフライパンが必要だったのに、どこを探しても見つかりません。

カーラはおなかがすいていて、早く何か食べたいと思いました。お母さんにフライパンを見つけてほしいと思いました。もし見つからなかったら、今日のお昼は無しになるかもしれません。

そのときカーラは、「イエス様の助けがほしい」と心から思いました。

そして、カーラは、お祈りしました。

それからカーラは、おうちの中でフライパンを探しはじめました。

まず、自分の部屋にあるクローゼットに行ってみました。そこには学校に着ていく水色の制服がありました。

さらにクローゼットの奥を探してみると、学校用のリュックが出てきました。そのリュックは前に無くしたものでした。カーラは、リュックが見つかってうれしくなりました。しかし今は、リュックよりもお母さんのフライパンを見つけることの方が大事です。

カーラは玄関の靴棚へ向かいました。そこにはたくさんの靴が並んでいます。前に無くした自分の靴が見つかりました。妹のラナの靴も見つかりました。テレビのリモコンも見つかりました。お花でできた髪飾りも見つかりました。それから、もう一人の妹のミアの靴も見つかりました。

妹の靴が見つかって、よかったと思いました。しかし、今はやっぱりお母さんのフライパンを見つけることがいちばん大事です。

カーラはもう一度、自分の部屋に戻りました。床には、大きなものから小さなものまで、いろいろなおもちゃがちらかっていました。本当は、おもちゃは全部、おもちゃ箱にしまって、部屋をきれいにしておかなくてはいけません。

その時、カーラはおもちゃを片づける気分ではありませんでした。しかし、もしかして、おもちゃ箱の中に何かおもちゃが残っているかもしれないと思って、ふたを開けてみました。

すると中には、２つのものがありました。人形と……お母さんのフライパンです！！

カーラは、大喜びしました！　どうしてフライパンがここにあったのか、まったく分かりません。しかし、それは気にしません。見つかったことが、うれしくてしかたなかったからです。

カーラの顔に大きな笑みが広がりました。

「イエス様、フライパンを見つけるのを助けてくれて、ありがとう！」と、カーラは声をあげました。

それからフライパンを持って、キッチンまで走って行きました。「お母さん！　これでお昼ごはんが作れるよ！」

こうしてカーラはその日、お昼ごはんを食べそびれることはありませんでした。

この日のごはんはとてもおいしく感じられました。お昼ごはんは、祈りのこたえとして見つかったフライパンで作られたものだったからです。

ごはんを食べながら、カーラは幸せそうにほほ笑みました。イエス様が自分を助けてくれたからです。本当に、イエス様が自分を愛してくださっていることがわかったからです。

〈お話のヒント〉

地図で南アメリカとチリの位置を探してから、カーラの住むイースター島がどこにあるか見てみましょう。

- YouTubeの短い動画で、カーラを見てみましょう。bit.ly/Kala-SAD
- このお話の写真をFacebookからダウンロードしましょう。bit.ly/fb-mq.

豆知識

- チリには、「チリ・ロデオ」という伝統的なスポーツがあります。これはチリの国技です。
- ふたりのカウボーイ（「ウアッソ」と呼ばれる伝統的な服を着た人たち）が、乗っている馬の胸で若い雄牛を停止させようとします。ロデオでは、チリの馬だけが使われることになっています。

ガレージでのすてきな集会　　ブラジル

ダフネ

なんだかずるいなぁ……と、ブラジルに住む女の子、ダフネは思っていました。

毎週金曜日の夕方、お母さんたち、大人は近くの家に集まって、イエス様のことを分かち合っていました。しかし、子どもたちが集まってイエス様のことを話す小グループは、どこにもなかったのです。

10歳のダフネと、13歳のお姉ちゃんイザドラは、自分たちの家のソファに座って、「やっぱりずるいよね」と話していました。

その時、ふたりにすてきなアイデアがうかびました！　そしてすぐに、別の部屋にいたお母さんのところへ走っていきました。

「ねぇ、お母さん！」「イエス様のことをお話しする子どもの小グループを作ってもいい？」と、ダフネが聞きました。

お母さんはにっこり笑って、「それは、とてもすてきなアイデアね！」と言いました。

ダフネとイザドラはすぐに準備を始めました。ふたりはソファに戻って、「子どもの小グループ」のアイデアを紙に書きました。そして1週間かけて、プログラムを計画しました。集まる場所も必要です。お母さんたちは、ふたりの友だちでダフネと同じ10歳のギャビーの家のリビングに集まっているので、ダフネたちもギャビーに、「子どもの小グループはギャビーの家のガレージに集まってもいい？」と聞いてみました。ギャビーがお父さんとお母さんに聞くと、二人は賛成してくれました。こうして、子どもたちが集まる場所が決まりました。

次は、集会に来てくれる子どもを見つけなければなりません。ダフネとイザドラは、近くの公園へ行きました。ベンチで女の子たちが何人か話していたので、近づいていきました。

「こんにちは、お名前は？」と、ダフネがひとりの女の子に聞きました。

「ソフィアよ」と、女の子が答えました。

「あのね、ソフィア。金曜日の夜は、時間ある?」

ソフィアは、たいていひとりで家にいて、退屈していると言いました。

「じゃあ、ギャビーの家においでよ！」と、ダフネが言いました。「ゲームをしたり、おやつを食べたり、神様のお話をしたりするんだよ。ギャビーのこと、知っているよね？」

ソフィアはギャビーのことを知っていて、すぐに「行きたい！」と、答えてくれました。また、お父さんとお母さんに聞いてみるけど、きっと行ってもいいって言うと思うよ、と言いました。

ダフネは、お友だちにも声をかけて、いっしょに来てねと付け加えました。

それからふたりは公園の中を歩いて、見かけた子どもたち一人ひとりに話しかけました。声をかけた全員が「うん、行くよ！」と答えてくれました。

そして金曜日の夕方、公園で会った子どもたち全員が、ギャビーの家のガレージに集まりました。ソフィアだけでなく25人もの子どもたちが来てくれて、ダフネはびっくりしました。それから、うれしくてしかたがありませんでした。

集会のはじめに、ダフネとイザドラは自己紹介をして、みんなを笑顔で迎えました。

それからダフネは言いました。

「今は金曜日の夜なのでわたしたちはとってもうれしいです。もう安息日が始まっているからです」

ほかの子どもたちは、すこし不思議そうな顔をしました。

「えっ、どうして？　どうして安息日なの？」と、ソフィアが言いました。

それこそが、ダフネが期待していた反応でした。そこでダフネは説明しました。「聖書には、安息日は金曜日の日没から土曜日の日没までって書いてあるんだよ。」それからみんなで聖書を開いて、神様が世界を創ったあとに安息日に休まれたことを読みました。そして、「安息日を心に留め、これを聖別せよ。」と書かれた十戒の第４条（出エジプト 20：8）も読みました。

「なるほど！　そういう意味だったんだね」と、ソフィアが言いました。

聖書のお話が終わると、ダフネとイザドラがポップコーン、グァバジュース、それからマンゴージュースを出しました。みんなが楽しくしているうちに、あっという間に 90 分がたって、おしまいの時間になりました。「来週の金曜日も、また来てね！」とダフネが言うと、みんなはまた来ると言いました。集会が気に入ったのです。

「すごく楽しかった!」と、ソフィアが言いました。

「来週は差し入れを持ってくるね！」と、言う人もいました。

次の金曜日、子どもたちは聖書のお話のあとに食べるチョコレートケーキやキャンディなどのおかしを持ってやって来ました。

何週間かたつうちに、ダフネはソフィアがこの集まりをとても楽しみにしていることに気づきました。イエス様のことを学ぶのが大好きになっていたのです。

最初の集まりから 15 週目の金曜日、ダフネはソフィアに聞きました。

「イエス様を信じて、バプテスマを受けたいと思う?」

「うん、受けたい！」と、ソフィアは目を輝かせて答えました。

今までに、ソフィアと子どもの小グループの何人かが、バプテスマを受けました。それだけではありません。ソフィアが聖書の話をするのを聞いたおじさんとおばさんも、バプテスマを受けたいと思うようになったのです。

ダフネはとても幸せです。子どもの小グループがあるのは、すばらしいことです。

今期の 13 回献金を通して、ブラジルの多くの人々がイエス様を知ることができますように、お祈りください。この献金の一部は、ブラジルのペルナンブカーノ・アドベンチスト・アカデミーに、子どものための教会を建てるために使われます。この学校は、ダフネが暮らしている地域にあります。この大切なプロジェクトのために、心のこもった献金をご計画くださり、ありがとうございます。

〈お話のヒント〉

- 地図でブラジルを探してみましょう。
- YouTubeの短い動画で、ダフネを見てみましょう。bit.ly/Dafne-SAD
- このお話の写真をFacebookからダウンロードしましょう。bit.ly/fb-mq.
- ダフネのようにお友だちを招いて一緒に聖書を学ぶよう、子どもたちに勧めてください。どうやったら小グループを始められるか話し合ってみましょう。親たちとも話をしてください。そして、小グループを始める際は親の許可を得るよう子どもたちに念を押してください。

豆知識

- アマゾンの熱帯雨林の60％はブラジルにあります。

テレビのニュースが怖い　　ブラジル

アンドリエリ

ブラジルに住む 10 歳のアンドリエリは、テレビのニュースを見るたびに怖い気持ちになっていました。

アンドリエリの家では、お父さんが毎晩テレビをつけてニュースを見ます。アンドリエリと 13 歳のお兄ちゃんアレフもニュースをいっしょに見ていました。

しかし、ニュースはたくさんの悪いことを伝えていました。嵐や地しん、ほかの自然災害が毎晩のように放送されているように思えました。また、ぬすみや殺人などの怖い事件も、毎晩のように伝えていました。

ニュースを見ることは怖いことでした。あまりにも悪いことが多くて、アンドリエリは「世界はもうすぐ終わるんじゃないかしら」と、思うようになりました。

世界の終わりについては、教会で聞いたことがあります。日曜日になると、アンドリエリとアレフは、お姉ちゃんのシャーリーに連れられて、アドベンチストではない教会へ行っていました。

教会では、「世界が終わるときには、イエス様が来て、神様の子どもたちを天国に連れて行ってくださる」と、聞きました。

アンドリエリは、天国に行って、イエス様といっしょに住みたいと心から思いました。

しかし、説教をしている先生たちは、どうすれば天国に行ってイエス様と一緒に住めるのかについて、話してくれませんでした。聖書を開いて、どうやってイエス様を迎える準備をすればいいのかについて、聖句から教えてくれることはなかったのです。

そのためにアンドリエリは、自分で聖書を読んで、その答えを見つけようと思いました。家に小さな新約聖書があったので、毎晩寝る前に読むようになりました。

マタイによる福音書や、ヨハネの黙示録などを読んでみました。とてもおもしろいけれども、難しくて、よく分からないところがたくさんありました。どうやったら天国に行く準備ができるのかについては、まだ分かりませんでした。

ある晩、また怖いニュースを見たあと、アンドリエリはお兄ちゃんのアレフに話しかけました。「わたしたちが天国へ行く準備ができる本当の教会を見つけられるようにイエス様にお願いしてみよう。」アレフは賛成して、目をとじて一緒にお祈りしました。

「イエス様、わたしたちを本当の教会へ連れていってください。あなたを迎える準備をしたいんです。本当に、本当に、天国へ行きたいです。」お祈りをすると、少し心が軽くなりました。きっとイエス様が、天国へ行く準備ができるように助けてくださる、そんな気がしたからです。

それから 2 年がたちました。

アンドリエリとお姉さんのシャーリーは、お父さんといっしょに暮らす生活から、お母さんと新しいお父さんと暮らす生活に変わりました。お兄ちゃんのアレフは、そのままお父さんと住んでいました。

ある土曜日の朝、シャーリーが突然言いました。「アンドリエリ、教会へ行こうよ」。アンドリエリはびっくりしました。土曜日に教会へ行ったことがなかったからです。おかしな感じがしましたが、普段からシャーリーと一緒に教会へ行っていたので、出かけることにしました。

着いたのはセブンスデー・アドベンチスト教会でした。そこでは、人びとがあたたかくふたりを迎えてくれました。アンドリエリはとても心が落ち着きました。みんなが聖書を開いて読んでいる姿を見て嬉しくなりました。そして「ここは自分の場所だ」と感じました。

アンドリエリとシャーリーは次の週も教会に行きました。そしてその次の週も行きました。

そして教会の女性２人と一緒に、聖書の学びを始めました。お母さんと新しいお父さんも参加してくれました。

聖書を読むうちに、アンドリエリはそこに「天国へ行く準備の仕方」が書かれていることに気がつきました。

ヨハネによる福音書３章16節には、こう書かれていました。「神は、その独り子をお与えになったほどに、世を愛された。独り子を信じる者が一人も滅びないで、永遠の命を得るためである。」

天国へ行くために必要なのは、イエス様を信じることだけだったのです。

その時アンドリエリは、あの２年前の祈りに、神様が応えてくださっていたことに気づきました。彼女は一番大きな疑問の答えを聖書から見つけたのです。

いま、アンドリエリは27歳になり、看護師として働きながら、フィリピンで宣教師になるための準備をしています。彼女は世界の人々に、世界は終わりに近づいていること、イエス様を信じることで、天国への準備ができることを伝えたいと思っています。

アンドリエリは次のように話しています。「小さな子どもだった私の祈りにも、神様は応えてくださいました。神様の教会へと導いてくださったことに、本当に感謝しています。」

今期の13回献金を通して、ブラジルの多くの人々がイエス様を知ることができますように、お祈りください。この献金の一部は、ブラジルのペルナンブカーノ・アドベンチスト・アカデミーに、子どもたちのための教会を建てるために使われます。この学校は、アンドリエリが暮らしている地域にあります。この大切なプロジェクトのために、心のこもった献金をご計画くださり、ありがとうございます。

〈お話のヒント〉

・地図でブラジルを探してみましょう。
・このお話の写真をFacebookからダウンロードしましょう。bit.ly/fb-mq.

豆知識

- 「ブラジル」という名前は、「ブラジルウッド」（残り火のように赤い、という意味）という木から来ています。この木は海岸ちかくに生えていて、とても美しい赤い染料がとれます。

神様との人生はすばらしい　ブラジル

アンダーソン

アンダーソンのお母さんがブラジルのノースイースタン・アドベンチスト・スクールで働いていたころ、家族のくらしはとても安定していて、食べ物に困ることもありませんでした。

お母さんが先生や生徒たちの洗濯物をする仕事を始めたのは、アンダーソンが6歳のときでした。学校の敷地には川が流れていましたが、水が汚れていたため、お母さんは遠くのきれいな水のある川まで洗濯物を運ばなければなりませんでした。そして、洗濯物を手で洗い、干して、アイロンをかけて、きれいにたたんでいました。

安息日になると、お母さんはアンダーソンを学校の教会に連れて行ってくれました。そこでアンダーソンは神様のことを学びました。

ところがある時、大きな災害が起きました。アンダーソンが11歳のとき、いつもよりたくさん雨が降りました。汚い川の水はどんどん増えて、ついには先生たちの家が水に浸かってしまいました。学校の教会も水に浸かり、校舎もすべてが水に覆われて壊れてしまいました。アンダーソンの家も壊れたので、住む場所がなくなってしまいました。そしてお母さんの働く場所も失われてしまいました。

それから家族の生活はとても苦しくなりました。何か月か小さな農場で暮らしたあと、町へ引っ越しました。そしてさらに別の町へ移ることになりました。

アンダーソンは教会へ行かなくなり、神様のことを学ぶこともやめてしまいました。

それから3年が過ぎました。アンダーソンが14歳になったとき、お店の手伝いの仕事を始めました。そこで、一緒に働いていたマルロンから、神様のことを聞くようになりました。マルロンは神さまのことを話すのが好きで、「豚肉や清くない肉は、神様が食べないようにと言われているんだよ」と、教えてくれました。

その話を聞いたアンダーソンは、ちょっといたずらをしてみようと思いました。ある晩、こっそりと店の冷凍庫から豚肉を取り出して、次の日マルロンが使う自転車のハンドルにぐるぐる巻きつけておきました。

次の朝、店に来たマルロンは、自転車のハンドルに巻きつけられた豚肉を見てびっくりしました。そして「これ、だれがやったの？」と聞きましたが、まわりの店員たちはクスクス笑うだけでした。

アンダーソンは何も知らないふりをして、こっそり笑っていました。

マルロンは豚肉にさわりたくなかったので、ほうきを使ってハンドルから肉を床に落としました。アンダーソンは、何気ない様子で床の豚肉を拾い、包みなおして、売り物を入れている冷凍庫に戻しました。

彼はいたずらが気に入って、その後も何度もマルロンにいたずらをしかけました。マルロンはやがてアンダーソンが犯人だと気づきましたが、怒ったりはしませんでした。ただ首をふって、「またか……」と言うだけで、いつも「教会に来

ない？」と声をかけてくれました。

しかし、アンダーソンは行きませんでした。

1年が過ぎ……2年が過ぎ……8年が過ぎました。マルロンはアンダーソンに会うたびに、「教会に来てみない？」と誘い続けました。

そしてある日、アンダーソンはとうとう教会に行ってみることにしました。そのとき、教会では伝道集会が開かれていて、マルロンがイエス様のことを話していました。

アンダーソンは次の日も、さらにその次の日も集会に参加しました。イエス様について学ぶうちに、昔のことが次々と思い出されました。子どものころ、お母さんに手を引かれて、ノースイースタン・アドベンチスト・スクールの教会へ通っていた日のことです。

やがて、アンダーソンはバプテスマを受けました。

それからは、アンダーソンが人々を教会へ招く番になりました。イエス様のことを、みんなに知ってほしいと心から思ったからです。

これまで、アンダーソンはブラジルに3つの教会を建て、100人以上をバプテスマへと導きました。その中には、お母さんや家族の人たちも含まれています。

アンダーソンは、人生はすばらしいと言っています。そしてこう言っています。「神様と人を愛するとき、人生はとてもすばらしいものになるんだ。だから、何度でも、何度でも、教会に来てって声をかけるんだ。マルロンがぼくにしてくれたようにね。」そして、「マルロンの姿を見ていたから、ぼくは家族を誘うことをやめなかったんだ」と語っています。

今期の13回献金の一部は、ブラジルのペルナンブカーノ・アドベンチスト・アカデミーに教会を建てるために使われます。この学校は、洪水で破壊されたノースイースタン・アドベンチスト・スクールの代わりに建てられましたが、まだ自分たちの教会堂がありません。皆さんの献金は、アンダーソンが子どもの頃お母さんと礼拝をしていたように、今の子どもたちが家族と礼拝できる教会を建てるために使われます。この大切なプロジェクトのために、心のこもった献金をご計画くださり、ありがとうございます。

〈お話のヒント〉

- 地図でブラジルを探してみましょう。
- YouTubeの短い動画で、アンダーソンを見てみましょう。bit.ly/Anderson-SAD
- このお話の写真をFacebookからダウンロードしましょう。bit.ly/fb-mq.
- 北東部アドベンチスト学校は1943年に設立され、多くの教会指導者を育てました。2000年の洪水で壊れてしまいましたが、2014年に新しい学校がオープンしました。

豆知識

- 1700年代の中ごろ、ブラジルでは「サトウキビ」がもっとも大きな輸出品でした。一方、もっとも多く「輸入」されたのは、その農園で働くためにアフリカから連れてこられた奴隷たちでした。

アマゾンの忠実な少年　ブラジル

グラウコ

グラウコには６人のお兄さんと、５人のお姉さんがいました。しかし、グラウコはみんなから愛されていないように感じていました。お母さんからも、家を出て行ったお父さんからも、自分が愛されていないように感じていました。

なぜグラウコは、自分はみんなから愛されていないように感じていたのでしょうか。それは、グラウコがまだ小さい頃、彼の住んでいたブラジルのアマゾン川沿いの小さな村に、セブンスデー・アドベンチスト教会の宣教師たちがやってきたことから始まりました。彼らは教会を建てると、教会の働きをピタという宣教師にまかせて去りました。

ピタは３か月の間、村の人たちにイエス様のことを教えてくれました。グラウコにはお祈りの仕方や、安息日、また、その他の十戒についても話してくれました。そして、教会の「アドベンチャー・クラブ」に誘ってくれました。

グラウコはそのクラブに入ろうかどうか迷いましたが、集まりに参加してみると、とても楽しくて、聖書のお話を聞くのが大好きになりました。次の週も行くのを楽しみにしていたのですが、行ってみると、クラブは閉じられていました。教会も閉じられていました。ピタさんが急に村を出ていってしまったのです。小さなグラウコにはその理由がわかりませんでした。村には教会やクラブを続けられる人がいなかったので、どちらの活動も終わってしまいました。

それでもグラウコは、心の中ではずっと自分がセブンスデー・アドベンチストだと思っていました。家で聖書を、毎日のように読みました。安息日には自分の部屋で賛美歌を歌い、聖書を読みました。

グラウコは末っ子です。グラウコのお兄さんたちは、彼が聖書を読んで安息日を守っているのが気に入りませんでした。彼らは神様を信じていなかったので、グラウコにも「信じる必要はない」と言いました。

ある日、聖書を読んでいたグラウコの手から、お兄さんが聖書をひったくって、「こんなの、作り話だ」と言いました。

グラウコは、まだ小さすぎて言い返すことができず、ただ泣きました。

その後も、聖書を読むたびにお兄さんたちにいじめられました。ときには殴られることもありました。ある時、お兄さんたちは聖書を取り上げて、真っ二つに引き裂いてしまいました。

グラウコは、どうしたらいいかわかりませんでした。お母さんに話そうとしましたが、聞いてもらえませんでした。

何年もたち、グラウコは10代になりました。しかし、お兄さんたちは彼をからかい続けていました。

そんなある日、お母さんが言いました。

「アマゾン川に、水上教会〔船の教会〕が来たのよ。見に行きたいわ。今日、牧師さんが家に来て、船の上で神様を礼拝しませんかって誘ってくれたの。プレゼントがもらえるんですって！」

お兄さんたちは、サッカーボールやフライパンがもらえるかもと大はしゃぎで、「船に行こう

ぜ！」「何かもらえるかも！」と言いました。

グラウコは、船の教会ってどんなところだろう、と、確かめたくなりました。しかし、プレゼントには興味がありませんでした。ただ、牧師さんが何を話すのか聞いてみたかったのです。

グラウコはお母さんとお兄さんたちと一緒に水上教会へ行きました。牧師さんがプレゼントを配ったあと、健康についてのお話が始まりました。

牧師さんは初めにこう言いました。「私たちはセブンスデー・アドベンチスト教会から来ました。」その瞬間、グラウコの目がぱっと輝きました。

嬉しくてたまりません。この牧師さんはセブンスデー・アドベンチストだったのです！顔いっぱいに笑顔が広がりました。もうアドベンチスト教会には行けないかもしれないと、あきらめかけていたからです。

水上教会は村に５か月間とどまりました。毎週木曜日には１０代のための集まりがあり、歌ったりゲームをしたり、お話をしたりしました。牧師さんは、みんなに自分のことを話すようにと声をかけました。

グラウコは、家族に受け入れてもらっていないこと、アドベンチャー・クラブに１回しか行けなかったけれど、イエス様を愛し続けていることを話しました。

話し終えると、牧師さんが言いました。

「以前にもアドベンチスト教会に行っていたんだね。バプテスマを受けたいと思いますか？」この質問にグラウコはとても喜びました。もちろん、受けたかったからです。

牧師さんはさらに言いました。「ワンイヤー・ミッションという、１０代の若者や青年のための宣教プログラムがあるよ。君も参加してみない？」

「はい！　参加したいです！」と、グラウコはすぐに答えました。

しかし、お母さんやお兄さんたちは、バプテスマを受けることも、宣教師になることにも反対しました。

グラウコはもう１０代になっていましたが、まだ小さい子どものような気持ちになって、言い返せずにただ泣きました。

「生まれてからずっと、みんなは僕に一度だっていいことをしてくれなかったじゃないか。せめて僕を自由にさせてよ」

誰もグラウコがバプテスマを受けることを止めることはできなくなりました。グラウコはアマゾン川でバプテスマを受け、イエス様に心をささげました。水上教会の牧師さんが、村のほかの人たちと一緒にグラウコにバプテスマをしてくれました。長い間、閉じられていた村のアドベンチスト教会も、修理されて再び開かれました。

グラウコはとても幸せでした。イエス様に人生をささげることができたこと、そして、水上教会が去ったあとも、毎週安息日に教会へ行けることがうれしかったのです。宣教師になれるかどうかは、もう気になりませんでした。神様がきっと導いてくださると信じていたからです。

日がたつにつれて、お母さんは、グラウコがなぜそんなに幸せなのかが気になり、牧師さんと話すようになりました。そして、牧師さんと聖書の勉強を始めました。グラウコがバプテスマを受けた１か月後、お母さんもバプテスマを受けました。

それから、グラウコの人生はすっかり変わりました。お母さんは宣教師になることに賛成してくれて、「神様に仕えてきなさい」と言ってくれました。

今、グラウコは１年間の宣教活動に向けて準備をしています。これ以上ないほど幸せな気持ちです。

「人が何を言っても関係ありません。聖書に書かれているイエス様の言葉に従えばいいんです」と、グラウコは言っています。

この水上教会は、2016 年の 13 回献金の助けを受けて購入されました。今期の献金も、ブラジルの重要なプロジェクトのために使われます。ブラジルのペルナンブカーノ・アドベンチスト・アカデミーに子どもたちのための教会を建てるというプロジェクトです。また、チリでは以下の３つのプロジェクトを支援します。

・低所得地域の教会に100の子ども用安息日学校教室の開設
・チリ・アドベンチスト大学に50人分の新しい

学生寮の建設

・毎年30人の宣教師を世界に送り出すための「アドベンチスト・ボランティア・サービスセンター」の設立

これらの重要なプロジェクトへの皆さんの献金を感謝します。

〈お話のヒント〉

・地図でブラジルのマナウスを探してみましょう。グラウコの村はマナウスの近くのアマゾン川沿いにあります。
・YouTubeの短い動画で、グラウコを見てみましょう。bit.ly/Glauco-SAD
・このお話の写真をFacebookからダウンロードしましょう。bit.ly/fb-mq